



心の歌を奏で て

—仮面の国—
①中の①

芳田尚哉

翌日も、どこか悶々としたまま、竹刀を振っていた。

「ファイさん、もっと集中して下さい。気が乱れています」

と、何度も注意された。

キヨカにはああ言ったものの、やっぱりミカツチさんについて気になってしまう。

気にしちゃいけないって考えれば考えるほど、余計に集中できなくなってしまう。

この悪循環をなんとかするには、はっきりと訊けばいいんだけど、それができないのがこの国なんだよな。

「ファイさん、集中を」

そんな事を考えていると、またミカツチさんに注意されてしまう。

「ファイは雑念が多いんだよ」

キヨカにまで言われてしまう。

それにしても、どうしてキヨカは、ああ平然としていられるんだ？ この集中力はすごいよな。そこは見習わないといけないな。

この時間を大切に作るなら、余計な事を考えずに集中だな。

無心を意識して——って、なんだか矛盾してる気がしなくもないけど——竹刀を振り続ける。

「なあ、シータ」

「ん？ 何したの？」

その日の夜、少し前から考えてた事を言う事にした。

「あのさ、そろそろ蟲(ベステート)を探しにいかないか？」

まだまだ未熟だけど、これ以上時間を使うわけにもいかない。どこかで区切りをつけないといけないだろう。

「……うん」

キヨカは笑顔で頷いた。

「いつ言い出すかなって思ってたんだ」

「そっか……。でも、この生活を……」

「楽しいよ。そんなの当たり前じゃん。だけど、私たちは私たちがしないといけない事をしないとけないんだよ。だから、それでいいんだよ」

「シータ……」

なんだか悩んでいたのが莫迦らしいじゃないか。そうだよな。キヨカなら、そうだよな。

ああ、すっきりした。

特に悩んでたってわけでもないんだけど、やっぱりなんか言い出しにくかったからな。肩の荷が下りたってのは言い過ぎかもしれないけど、楽になったのは確かだ。

「じゃあ、ファイからミカツチさんに言ってね」

「あ、ああ」

そのつもりだったけど、改めて考えると緊張するな。

「もう、この生活には飽きたんだ。お前とはこれまでだ——なあんて、私には絶対に言えないね、そんな事」

「俺だって言わねえよ」

どうしてそんな風に言わないといけないんだよ。

ああ……だけど、どうやって言えばいいんだろう。言い出すタイミングが難しいよな。

「私はいつでもいいよ。そうだ。なんだったら、明日にでも列車の出発日を訊いてくるよ」

そういや、移動するには列車なんだよな。しかも、毎日じゃないから、それに合わせないといけないんだ。

「ヘタレのファイはしょうがないから、出発日を確認してからでいいよ」

「……………すまん」

全く言い返せない。ああ、自分でヘタレと認めるのはな……。どうなんだろうな。でも、その部分はわりと事実なんだよな。

「わかった。頼む」

「あれ？ 今回は素直だね」

「……………まあな」

ぼそりと呟くと、キヨカはつまんないと言って、寝る準備を始めてしまう。反応が面白くなかったんだろうな。だけど、俺はキヨカを楽しませるためにしてるわけじゃないからな。

でもやっぱり、いざこの生活を終わらせるとなると、勇気が必要になってくる。なにせ、一ヶ月くらいはこの生活を続けてたんだもん。これが当たり前になってきていた。だから、ミカヅチさんも家族みたいなものだったから、いて当たり前だったから、別れるのは辛い。

このまま、一緒に旅ができればいいのに……なんて、そんな事を考えてしまう。絶対に無理だってわかってるのに。

「とにかく、今日は寝るか」

明日も修行だからな。少しでも強くならないと。

「じゃあ、私はちょっと出掛けてくるね」

そう言って、キヨカは列車の出発日を調べるために出掛けていった。

「それでは、わたしたちは修行を始めましょうか」

「はい」

ミカヅチさんと竹刀を交えて修行をしていく。最近は、実戦に近いものが多くなった。

そういや、ミカヅチさんと二人って久しぶりじゃないか？ 最初の頃以来だろ。やっぱり、三人でいるのが当たり前だったから、こういうのは変な感じだ。

こうして、ミカヅチさんと竹刀を交えるのもあとわずかだと思えば、この一瞬一瞬を大切にしなければと思えてくる。

「とても強くなりましたね」

「ミカヅチさんのお蔭です」

竹刀を交えながらの会話は楽しい。元々ないけど、駆け引きのない純粋な会話だ。

命を懸けるような場面ならまだしも、今のよう時はコミュニケーションとして重要だ。

「ファイさんの資質あればこそです」

「いえ、やっぱり指導のお蔭です」

こういうやり取りもなんだかいいな……。

竹刀を交わしていると、徐々に本気になってきたりもする。

不意について、ミカツチさんに攻め込みたいんだけど、ミカツチさんはさらりとそれを受け流してしまう。

そうされると、ちょっとムキになってくるもので、つい狙ってしまう。

それでも、ミカツチさんは難なく受け流してしまう。

いっそ、なにか意表をつく攻撃をしようか——と思うものの、有効な攻撃が思いつかない。なにをしても受け流されてしまいそうだ。

「人外相手になければ、ファイさんは立派な師範代ですね」

「そんな……」

と、謙遜しつつ、なにかが引っかかった。

ん？ ミカツチさんは、さっき「人外相手になければ、って言わなかったか？

人外——それこそ蟲(ベステート)じゃないか。

やっぱり、ミカツチさんは、なにか蟲(ベステート)について知ってるんじゃないだろうか。

確かめたくても確かめられないのがつらい。

もしなにか知っているなら、蟲(ベステート)についての情報が欲しい。なにをするにも、情報は大切だからな。

「あっ」

なんて余計な事を考えたせいで、手元が狂ってしまった。俺の竹刀が、ミカツチさんの脇を通る。その勢いで前のめりに倒れそうになる。

なんとか転ぶのは持ちこたえたが、ミカツチさんに肩を当ててしまう。

「すみません」

普通ならそのまま一緒に倒れていそうなものだが、さすがミカツチさんはそのまま踏ん張ってくれた。

「大丈夫ですか？」

「……はい」

ビックリした……。余計な事を考えると、こうなるんだよな。

「あ、す、すみません」

ずっと肩を預けた状態になっていたので、慌てて離れる。

「本当にすみません」

「い、いえ、大丈夫ですよ」

ん？ ミカツチさんも動揺してる？

……まあ、別におかしくないよな。

それから、なんとなく手合わせするのが気まずくて、俺はひたすら風伯を持って素振りを続けていた。

それにしても、風伯の感触が変わってきたよな。竹刀に比べれば重いけど、風伯が軽く感じるようになってきた。まさに風のような。

一振りする度に、ふわりと風が舞う。風伯の風に包まれているようで心地いい。

そうしていると、昼頃にキヨカが戻ってきた。

「ファイ、戻ったよ」

「お帰り」

「お帰りなさい、シータさん」

「これ、お土産ね」

と、キヨカは飲食街でなにかを買ってきたらしい。香ばしい匂いが食欲をそそる。

「これね、あのスパイスを使った料理なんだよ」

そうなのか。あれをカレー以外で調理すると、こんな匂いになるんだ。

「とても良い香りですね」

「でしょ。これね、特別に作ってもらったんだよ」

「特別……って、そんなの頼んだのか」

キヨカは、えへへと自慢そうににやける。

「私が売ったスパイスだもん」

「そういう問題じゃないだろ。……お前、無茶言ったんだろ」

「快く作ってくれたよ。なんでも、このスパイスのお蔭で、大繁盛なんだってさ。できれば、もっと欲しいって言われちゃったよ」

「そうなのか」

だけど、このスパイスを調達する事はできない。強いて言えば、俺たちが自分たち用とお土産用に持っている分はあるんだけど。もしかして、それを売ろうとしてるのか？

「残念だけど、断るしかなかったんだよね。お土産用は、ちゃんと確保しておかないと。こんなに評判なら、みんなも喜んでくれるよ」

どうやら、そういうつもりはなかったらしい。

「せっかく売れるチャンスだから、シータなら売るかと思ったけどな」

「ファイ、それはひどいよ。そんな事しません。別に、お金儲けが目的じゃないからね。そりゃ、旅費は必要だけどね。あればそれでいいんだけど、そこまでしたくないよ」

「そうだな」

キヨカが守銭奴でなくてよかった。良識はあるらしい。

「だから、残ったスパイスを分析して、自分でオリジナル配合してみるんだって。なんだか燃えてたよ」

「そうなのか」

まあ、結果的にいい事をしたのかな。あれに近いものが完成すれば、この街の名物料理になるだろうし。

「というわけで、冷めないうちに食べちゃおう」

「ああ」

というわけで、キヨカが買ってきてくれた特別料理を食べながら、次の列車の出発日を確認する。

「えっとね、出発は明後日だって」

「明後日か……」

まあ、急すぎるってわけでもないな。

「ミカツチさん、俺たち……その……」

「はい。わかっております。向かうべき場所があるのですよね。ファイさんとシータさんは、すべき事を成し遂げて下さい」

ミカツチさんは、さほど驚いた様子もなく、淡々と告げる。それは決して冷たい印象ではなく、むしろ全てを見透かしているかのようだった。

「もちろん、再び修行をしたいという様な事がありましたら、お越し下されば喜んでお相手致します」

しかも、そんな事まで。

「ありがとうございます」

「じゃあ、私たちが修行できるのって、今日と明日のお昼までかな」

明日の昼まで？

「別に、明日は一日中大丈夫じゃないか？」

「準備は必要だよ。列車は日にちがかかるもん。その間の食べ物とか、色々必要じゃない」

「そうだな」

そういや、保存食は全部売ったんだよな。自分たちの分くらい、とっておいてもよかったんだけど、本当に全部を売ってしまった。まあ、ここにどのくらい滞在するか決めてなかったから、食わずにいるよりはお金に換えた方がよかったんだけど。

そのせいで、食べ物がなくなってしまったので、調達する必要があるが出てきた。

「それにね、もうちょっと旅費を稼がないと……なんだよね」

「そうなのか？」

財布はキヨカの管理が大きいので、自分の分の少し以外は把握していない。

「別に、いますぐどうこうじゃないんだけど、やっぱりなにかしら商売をして稼がないと、この先が不安なんだよ」

「そうなのか」

まあ、キヨカがそう言うならそうなんだろうな。

「ちなみに、どのくらいなんだ？」

「えっとね……」

キヨカに財布を見せてもらう。

「なんだ、結構あるじゃないか。それだけあれば、しばらくは……」

「ファイ、これじゃ足りないだよ」

「お前、どんな贅沢するつもりだよ」

「別にそんなつもりはないよ。だけど、これを増やそうと思えば、それなりの資金は必要になるんだよ。仮に、商売をするなら、なにかを仕入れないといけないでしょ。そのお金は必要でしょ。仕入れるなら、いくつかになるから、まとまったお金は必要なんだよ」

「なるほど……」

その辺は、キヨカに任せて正解だったようだ。俺だったら、今日の前の事しか考えてなかったかもな。

「そういうわけで、これが限界かな。だから、なにかを仕入れて、向こうの街で販売しようよ」

「だけど、同じ国だぞ。珍しいものがあるわけじゃなし、街の間じゃ取引だってあるだろうから、今あるものをそのままってわけにはいかなだろ」

「そうなんだよね……。で、考えたのさ」

キヨカはにやにやと笑う。

なにを考えてるんだ？ っていうか、なにを思いついたんだ？

「ファイ、お人形を作ってよ」

「……人形？」

突然なにを言い出すかと思えば、人形を作れ？ なにを考えてるんだ？

「ぬいぐるみだよ。ファイだったら、簡単に作れるでしょ？」

「まあ、簡単かどうかはあれだけど、材料があれば作れるぞ」

「よし、だったら生地とか綿とか、色々と材料を売ってそんなお店を探してくるよ」

「探してくるって……今からか？」

「そうだね。その方がいいかもしれないね」

「でもお前、修行は……」

「私は別にいいじゃない。ファイがちゃんとしてれば問題ないでしょ」

「そうかもしれないけど……」

キヨカだって楽しんでたのに。

「本当にいいのか？」

「大丈夫だよ。私は、旅のサポートをするよ」

それはそれでありがたいけど……。

「本当にいいのか？」

「さっきも同じ事を訊いたよ。しつこいのは嫌われるよ」

やっぱり、気が引けるんだよな。

キヨカだって、楽しそうに修行をしていた。実際、その成長はすごいものがある。このまま続ければ、かなりの腕前にだって……。それなのに……。

「というわけで、決定したからね。今日と明日は修行してもいいけど、それから先は、ひたすら作ってもらうからね。もちろん、可愛いんじゃないと認めないから」

「あ、ああ……」

強引に決まったが、依存はないから別にいい。

「じゃあそういう事で、私はお店を探してくるね。で、明日は一緒に材料を買うんだよ。私だけじゃ、どういうものがあるのかわからないから、ちゃんと一緒に行くんだからね」

「わかりました」

結局、修行できるのは、今日だけになりそうだな。明日は、それどころじゃないかもしれない。

だったら、思い残した事がないようにしないとな。

「ミカツチさん、午後からは、風伯を使って試合をさせてもらえませんか。もちろん、鞆のままで」

鞆のままなら、木刀とあまり変わらない。真剣の分重いけど。

今までずっと竹刀だったから、この重さに慣れておく必要がある。

「ええ、構いませんよ」

今までのやり取りを微笑ましく見守ってくれていたミカツチさんは、快く了承してくれた。

よし。

これぞ修行の集大成だな。

実戦じゃ竹刀じゃないからな。

風伯でどこまでできるのか。それを確かめないとな。

そういうわけで、キヨカは手芸の材料を売っている店を探しに出掛けた。

俺は風伯を持って道場に向かう。

ミカツチさんは、二振りの日本刀を持って現れた。

今まで見た事のないものだ。

それらは使い込まれているようで、鞘にはいくつもの傷がある。

「これは、わたしの大事な人の刀と、わたしが愛用していた刀です」

ミカツチさんの言葉は、今までにない重さがあった。

「最後という事でしたら、実際に刃を交えましょう」

「えっ？ それは……」

さすがに真剣同士ってのは……。

斬れたら大変な事になるだろ。

「お互いに命を奪い合うつもりはないはずですよ。刃は体にまでは届かないでしょう」

「そりゃ、寸止めはしますけど、それでも……」

「大丈夫ですよ。ファイさんの腕でしたら、安心出来ますので」

「でも……」

止めるつもりでいても、思わず……って事があるだろ。どんな事故があるかわからない。ミカツチさんは問題なく止められるだろうけど、俺はそういう事を起こすかもしれない。

「ご自身を信じて下さい。ファイさんなら大丈夫です」

「……………」

真剣なミカツチさんの視線を受け、俺はなにも言えなかった。

「それでは、始めましょうか」

ミカツチさんは、大事な人の刀を壁に掛け、自分のものだという刀を抜く。

煌めく刀身は、きちんと手入れがされているのがよくわかる。使っていなくても、きちんと手入れをしていたようだ。

「それじゃ……」

俺も風伯を抜く。

「やはり、素晴らしい刀身ですね」

まさか、こんな事になるなんて……。考えもしなかった。

この場にキヨカがいなくてよかった。いたらやめろと言うんだらうな。

だけど、こうなったら思い切りするだけだ。

キラリと二振りの刀身が光る。

人を相手に、斬り合う事になるなんてな……。

間合いを取り、互いに刀を構える。

「いつでもどうぞ」

ミカツチさんは、真っ直ぐに俺を見ている。

本当にいいのかな……。

真剣同士で交えるなんて、初めての経験だ。相手が玄人だから、俺も集中して振れるんだけど、それでもやっぱり怖い。緊張じゃない。怖い。

人に対して刃を向ける事がこんなに怖いなんて……。

蟲(ベステート)を相手にするのは全然違う。

緊張で手が震えてくる。

「緊張されているのですか」

「……はい。人に対して、刃を向けるなんて初めてですから」

「……そうですか。ファイさんの時代は、とても平和なのでしょうね」

「……まあ、そうなんですかね」

俺たちの時代は、確かに平和なのかもしれない。実際はそうじゃないのに、平和だと思い込んでいる。自分たちの周囲には、たいした事件はなく、テレビで見る事件は完全に他人事だ。そもそも、平和なんてない。旅に出てから、実感できるようにはなっている。

だけど、それと今の状況は違う。人に対して、刃を向ける事は、したいわけじゃない。

だが、これは試合のようなものだ。

限りなく実戦に近いだけ。

互いに殺意はない。

だけど、刃を向けている。

俺たちからすれば、非常識というか、尋常じゃないというか……とにかく、あり得ない。

「いきます」

震える手をなんとか制御して斬りかかる。

キンッと甲高い音が道場に響きわたる。

これが真剣同士の音なのか。

薄ら寒く、体が凍ってしまって動けなくなりそうだ。この音だけで、戦意が殺がれていく。

「緊張で体が動いていない様ですね」

ミカヅチさんは、冷静に俺を見ている。

「初めて人に刃を向けるのでしたら、さぞかし怖い思いをされているでしょう。その気持ちを忘れないで下さい」

忘れたくても、忘れられるとは思えない。

蟲(ベステート)に対しては、なにも思う事はなかった。

している事は同じはずなのに、相手が違うだけでこうも違うんだな。

「どうぞ、遠慮なく」

遠慮なくと言われても、躊躇するに決まってる。

「ファイさん、風伯の先には人はいないかもしれませんが。ですが、いずれそういう場面があるかもしれません。わたしでしたら、遠慮せず思い切り向かって来て下さって構いませんので」

だから、そう言われたからって、はいはいそうですか、と斬れるわけじゃない。

やっぱり、心がブレーキを掛けてしまう。

「では、こちらからも参ります」

えっ？ と思った瞬間には、ミカツチさんの刀が目の前にあった。

「くっ」

それをなんとか反射で受ける。

危ない危ない……。今までの修行がなかったら、確実に死んでいた。

「動きは体が記憶している様ですね」

ミカツチさんは確認するように言っているが、俺にすれば死線ギリギリだったんだぞ。受け止められたのは奇蹟だろう。

「真剣だと思わず、いつもの様に竹刀だと思って下さい。そうすれば問題ありません」

そう言われてもな……。やっぱり、風伯だからな……。

いくらこれが木刀に見えろとはいっても、それは鞘に収まっている時だ。抜いてしまえば日本刀だ。

「ちょっとそれは難しいです」

「今は無理でも、慣れて下さい。この先、必要になった時に、躊躇せずに済む様に」

さっきから、やたら `この先、の事を……。やっぱり、ミカツチさんはなにかを知っている。

この会話は、師匠と弟子という感じじゃない。同じ境遇の会話だ。

そういえば、さっき俺の `時代、の事を言わなかったか？

普通なら、俺たちの `世界、のはずだ。もしくは `国、だ。なのに `世界、だった。

ミカツチさんは、俺たちの事を知っている。気付いている。だから、こうして鍛えようとしてくれている。

だったら、精一杯甘えようじゃないか。こんな風に、鍛えてもらえるのは今しかないだろう。この先、こんな経験ができるとは思えない。

第一、この状況がすごくラッキーなんだ。あり得ない幸運なんだ。

「ミカツチさん、いきます」

俺は思いきり風伯を振る事にした。殺すつもりはもとより、傷つけるつもりもない。だけど、思い切り斬りかかる。そうしないと失礼だ。

「なかなかよい太刀筋です。その調子です」

俺の剣戟をミカツチさんは見事に受けている。

この人は、実戦経験があるのだろうか？ この慣れからして、想像はできるけど信じられない。

時代が時代なら、人を斬る事だってあるはずだ。

旅に出ているなら、そういう場面だってあるだろう。安全なはずがない。襲われる事だってあるだろう。その時は、反撃するに決まっている。

「その調子です」

「はい」

しばらく斬り結んでいると、これが当たり前のように思えてきてしまった。そんな自分が少し怖い。こうして、刃を人に向ける事をなんとも思わなくなってきた。

そんな自分に気付くと、途端に怖くなってしまって、距離をとってしまう。

「どうされたのですか？」

ミカツチさんの疑問は当然だ。

「すみません。急に怖くなってしまって……」

「そうですか。ですが、それに慣れて下さい。むしろ、わたしを斬るつもりでして下さい」

「ミカツチさんを斬るなんて……」

「わたしは、斬られるつもりはありません。ですので、安心して斬るつもりでお願いします。ファイさんが、もっと強くなるには、経験していくしかないのです」

経験……ね。確かに必要だろう。だけど、人を斬る経験はしなくてもいいんじゃないだろうか。

「これは、ファイさん自身を護るだけでなく、シータさんを護る為に必要な事です」

シータを護るために……。

そうだよな。俺だけじゃない。シータを護らないといけないんだ。

もし、俺たちが道中で襲撃されたら、相手が人でも遠慮なく攻撃しないと……。そうしないと、向こうがその気なんだから、みすみす命を落とす事になりかねない。旅をするって事は、そういう危険の中にいるって事だよな。

どうしても、旅行っていうと安全なイメージがあるけど、観光地じゃないし、そもそも違う世界だ。危険だと思っていないといけない。

今までも、命に関わる事じゃなかったけど、それらしい事はあった。

もっとも、そういう場面はなければそれでいいんだけど。

かといって、いきなり割り切れるものじゃない。

それでも、今はミカツチさんの胸を借りよう。

「わかりました。本気でいかせてもらいます」

自分の腕とミカツチさんの腕を信じて、思い切り向かっていく。

割り切ると意外と思いついた太刀筋になるらしい。かなり際どい太刀筋になっている。それでも、ミカツチさんは問題なく受けてくれている。

俺が受ける場面になると、どうしてもそうはいかない。

ミカツチさんは、こういう命のやり取りの経験があるんだろう。実戦経験がなければ、こうはならない。

剣道や剣術の修行だと竹刀や木刀など、模造刀でする事が多い。

なので、こうして真剣で向かい合うのは、気分が全然違う。

だけど、今は楽しい。

危険なのはわかっている。

それでも、ミカツチさんの腕が確かなので、全てを任せられる。それが大きい。

真剣を使っているはずなのに、いつも通りに打ち込めている。

金属が甲高い音を立てる。

次第にその音に酔ってくる。気分を高めてくれるというか、とにかくテンションが上がる。

刃物を持つって、こういう感じなんだろうな。なんだか、今なら斬り裂き魔の気分がわかってしまいそうだ。

「素晴らしい打ち込みです」

「ありがとうございます」

褒められて伸びるんだよな。

「ただいま～」

道場に、キヨカのものびりした声が響いた。

「おかえりなさい」

俺は疲れ果てて今にも寝そうな状況だったので、ミカツチさんだけが返事をした。

「あれ？ ファイはどうしたんですか？」

キヨカがとてとてと駆けてくる。

「最後だという事で、精根尽き果てるまで刀を交わしましたので、お疲れになった様です」

「精根尽き果てるまで……。ふうん。ファイってば、楽しんだんだね」

「……………」

もう答える元気はない。

確かに楽しかった。

命懸けってほどでもないけど、真剣での剣戟は、スリルがあって、一時も気が抜けなかった。

実戦じゃないから、少しは安心してたかもしれないけど、限りなく実戦に近かった。こんな風な気持ちでするのは初めてだった。

さすがにじいさんとする時は、竹刀か木刀だったからな。真剣同士なんて、させてもらえなかったし、そもそもしようと思わなかった。

結局、ミカツチさんに勝つ事はできなかった。何度かチャンスはあったと思うんだけど、最後まで踏み込めなかった。やっぱり、躊躇してしまった。

その度に、実際に襲われた時は、躊躇しないように言われた。その時に、俺はそうできるのだろうか。やっぱり、そういう戦乱の経験や、襲われたという事がないから、いざという時に対応できるかわからない。でも、キヨカを護るために、しなきゃいけないとは思う。

「ファイ、ちょっと情けなくない？」

「……………すまん、疲れて動けない」

「ファイさんは、とても素晴らしい剣戟でしたよ。わたしも、節々が痛いですから」

「ふうん。ファイってば、頑張ったんだ。でも、こうなったらダメだよな」

「……………なんとでも言え。これが俺の限界だ」

ミカツチさん相手にあれだけ打ち合えば、動けなくなって当然だっけ。

「ダメダメなファイに朗報だよ。なかなか可愛いお店を見つけたんだよ」

そういや、キヨカは手芸の材料を売ってそうな店を探してたんだっけ。

「よかったな」

だけど、今はそれどころじゃないんだよな。できれば、このまま寝てしまいたい。

「なに、それ。せっかく探してきたのに。明日は、ファイもそこに行くんだからね」

「はいはい、わかってますよ」

むきーっ！ とキヨカが怒っているが、相手をする元気がない。

「ファイってば、適当すぎだよ。もうちょっと、ちゃんと考えてよね。私たちの事なんだからね」

「わかってるって」

本当にわかってるんだけど、もう頭が朦朧としてきて、睡魔に完全に負けてしまいそうだ。

「ねえ、ミカツチさん。いったい、なにをしてたんですか？」

「真剣同士で試合をしていたくらいですよ」

「……………」

ミカツチさんの答えを聞いて、キヨカは俺をじっと見て、そしてミカツチさんを見る。

俺の脇には風伯が、そしてミカツチさんは紫の鞆に収まった日本刀を持っている。

「……マジ？」

信じられないという顔で俺を見る。そんなキヨカに、無言で頷いて答える。

「……真剣だよ。斬れちゃうんだよ。死んじゃうかもしれないんだよ」

そんなのわかってるっての。

「ミカツチさん、本当なんですか？」

「はい」

そもそも、ミカツチさんが説明しただろ。まあ、信じられないのはわかるけどさ。

「ファイってば、そんな危険な……って、もしかして、斬られちゃった？ ううん、ミカツチさんが、そんな事するわけないもんね」

「大丈夫だよ。単純に疲れただけ」

「……そっか。それならいいんだけど……………。って、やっぱりヘタレ？」

どうしてそうなるんだ？

「真剣同士だったら、精神的にも疲れちゃうのか。竹刀よりも重いし、体力も使うよね。うん、そうだよ」

わかってくれたか。

ふあああつ。

眠くなってきた。

「シータ、ちょっと寝るわ」

ちょっと我慢できないや。もう無理。言うだけ言って、目を閉じる。

「へっ？」

キヨカは驚いているみたいだけど、俺はもう眠くてしょうがない。

すまん。

完全に眠りに落ちた。

目が覚めた時には、日が暮れていた。道場は真っ暗でなにも見えない。

ゆっくりと体を起こす。

「布団……」

誰かが布団を掛けてくれていたらしい。おそらくミカツチさんだろう。

そういや、ミカツチさんは？

暗くてよくわからない。それでも見回して、ようやく人の姿を見つける。誰かが座ったまま眠っている。

「ミカツ……」

それはミカツチさんじゃなかった。

「シータ？」

それはキヨカだった。

「どうしてこんな所で……」

よく眠っているみたいなので、起こさないように気を付けながら、俺が掛けていた布団を掛ける。

座ったままって体が痛くないか？

そう思うものの、起こさずに横にさせる事はできそうにない。このまま、そっとしておこう。

「シータがここにいるのはわかったけど、ミカツチさんはどこなんだ？」

もしかして外で素振りでもしているのかと思い外に出るが、そこには誰の姿もなかった。

「他には……」

一ヶ月くらい一緒にいるのに、俺はミカツチさんの普段の行動を全く知らなかった。

道場で修行の日々だったので、その他の場所がわからない。

「まあ、ミカツチさんの場合、四六時中、剣の修行をしてるんだろうけど」

その姿が一番しっくりくる。

だとしたら自室かな。

そこ以外、もう思い付く場所はない。

だけど、そこに入るわけにはいかないので、ここで搜索終了。

「ああ～、腹減った」

安心したせいか、急に空腹を感じる。

「そういや、今日はほとんどなにも食べてないんだよな」

朝食を食べてから、ミカツチさんと真剣で勝負した。その後、疲れ果てて眠ってしまったからな……。

もう、夕飯時だよな。

準備でもしてようかな……。

ミカツチさんも休んでいるっぽいし、ここは俺が夕食を作って驚かせてやろう。

よし、そうと決まれば準備だ。

と、意気込んでみたはいいものの、俺が作れる料理ってほとんどないし、普段はミカヅチさんとキヨカが作ってくれていたの、どこになにかがあるのかわからない。

それでも、なんとか見つけ出した食材で、俺が作れそうなものを考える。

材料は肉に野菜に魚とだいたい揃っている。基本的な調味料だってある。レシピさえあれば、なんでも作れそう。

男料理の基本は「焼く、だよな。肉でも野菜でも、とりあえず焼けばなんとかなる。

でもそれじゃ、二人を驚かせられないんだよな。

かといって、今から煮込み系の料理は時間が足りない。すぐにできて、驚かせられそうなものって……思い浮かばない。

「まあ、驚かせるとか考えなくていいか」

そんな派手なものを作れるわけじゃないし、簡単なものにしておこう。時間もないからな。

というわけで、ご飯をまず用意。さすがにこれから炊くと時間が掛かるな……。でもないものはしょうがない。

米を研いで鍋に準備。炊飯ジャーがないから、なかなかこれが難しい。何度も失敗してるんだよな。

ご飯を炊いている間に、野菜を切っていく。いくつかの野菜を微塵切りにして、肉も同じように小さく切る。

そして、トマトを潰してペースト状に。そこにサンプル用のスパイスを少々。他にも調味料と風味付けに葡萄酒を入れて煮詰めていく。

「さて、これで準備はだいたいできたかな」

ご飯の出来上がり、ソースの出来上りを待つ。

「付け合わせにサラダも欲しいよな」

というわけで、葉ものの野菜を水にさらしておく。ドレッシングは、キヨカが作ったお手製マヨネーズがあるからそれでいいな。

「あとは、二人が起きる頃に仕上げだな」

ソースの鍋とご飯の鍋を見守り、なんとか二つは完成した。

「成功してよかった……」

ご飯もちょうどいい感じだ。

その頃になると、匂いを嗅ぎ付けたのか、キヨカが起きてきた。

「あれ……？ ファイ？」

目を擦りながらやってくる。

「なにしてるの？」

「おっ、ちょうどいい感じだな。すぐに夕食作るからな」

炊き上がったご飯と細かく刻んだ野菜と肉と一緒に炒める。そこにちょっとだけソースを入れて完成。

それとは別に、卵を半熟に焼く。

ご飯をお皿に盛りつけて、半熟の卵をその上に。そこソースを掛ければオムライスの完成。

「ファイ、すごいね……」

たまに作る料理に感動される。普段しないから、こうして作るだけで驚かれるんだな。

と、そこにミカツチさんもやってきた。

「すみません。すっかり眠ってしまいました。……あら？　これは……」

目の前のオムライスをじっと見ている。

「ああ、俺が作ったんです。ミカツチさんの分も、すぐに作りますね」

ほとんど同じタイミングなので、すぐに出来上がる。俺の分も作って、サラダを盛れば完成。

「ファイさんがお料理を……」

そういや、ここに来てからは作ってなかったかも。

「まあ、簡単なものですけど」

「いえ、とても美味しそうです」

「ホントだよ。ファイのオムライスか……。お腹ペコペコなんだよね。いただきます」

キヨカは早速食べ始める。

「ミカツチさんもどうぞ。お口に合えばいいんですけど」

「いただきます」

ミカツチさんは、少し緊張した面持ちで、俺が作ったオムライスを口に運ぶ。

「ふあっ、美味しいです」

「よかった……」

その言葉を聞いて安心する。

「ファイ、本当に美味しいよ」

キヨカがぱくぱく食べているのが証拠だろう。本当に成功してよかった。

「いただきます」

俺も自分の分を食べる。

「……いけるな」

我ながら成功だ。

「ねえ、おかわりある？」

まだ皿に残っているにも関わらず、そんな事を訊いてくる。

「材料はちょっと余ってるから、作れると思うけど」

分量が多くて、少し野菜が残ってしまっている。ソースも少しだけ。

「じゃあ、おかわり予約ね」

「はあ？　予約ってなんだよ」

「だから、今から作ってよ。出来上がる頃には、ちょうど食べ終わるから」

「……………はあ？」

なんだ、そりゃ。俺は今から食べ始めるってのに。

「出来ましたら、わたしも頂ければと……」

ミカツチさんも？

「ほら、ファイは準備してよ」

「ったく……」

まあ、それだけ美味しいって事だよな。喜んでくれる分には嬉しい。

だけど、材料が足りるかな……。さすがにあと三人分は無理かな……。

まあ、その辺は材料を調節してみよう。

「今日の夕ご飯は美味しかったね」

「はい。とても美味しかったです」

満足そうな二人の顔を見て、俺も嬉しかった。

今は片付けをしている。

「結局、みんな二人前を食べたのか」

「美味しかったんだもん。またいつか作ってよ」

「……気が向いたらな」

得意ってわけじゃないし、そもそも今日はたまたま成功しただけだ。失敗の方が多い。

「本当に、また食べてみたいと思いました」

「ミカツチさんに喜んでもらえてよかったです」

それだけで満足だ。

今までのお礼を少しでもできたかな……。なんて。最初はそんな事考えてなかったから、完全に後付けなんだけど。

「お腹もいっぱいになったし、今日はぐっすり眠れそうだよ」

「まだ寝るつもりかよ」

あれだけ寝て、まだ寝るってのか？

とか思いつつ、正直俺もちょっと眠い。

「そうですね。空腹が満たされると、眠くなってきますね。今日はもう休みましょう」

「そうですね」

これから修行は厳しい。それはそれで淋しいけど、無理をするわけにはいかない。

「ファイってば、ミカツチさんが言うと賛成するんだから」

「まあ、そういうものだよな」

「なんだよ、それ」

はははと笑いながら片付けを終える。

「さて、俺も寝るかな」

「ちょっと、ファイ」

そんな声を無視して、

「じゃあ、風呂に行きますか」

「そうですね」

「あっ、待ってよ。私も行くんだよ」

「わかってるって。ほれ、行くぞ」

俺たちは一緒に近くの温泉に向かった。

こうして過ごす日も、あとわずかなんだよな。

「というわけで、次の列車は明日なんだよ」

そうだった。

朝から、ここでの期限を伝えられ、なんだかしょんぼりしてしまう。

「だから、今日は準備しないとダメなんだよ」

急いで戻らなくてもいいのかもしれないけど、蟲(ベステート)が出現しそうな場所にいないといけない。

同じ国の中でも、ここと以前の場所は離れすぎている。

少しでも出現の可能性が高い場所にいないとな。

そもそも、俺たちの旅だって、いつまでも続けていいものじゃないし。自分たちの的に。

「わかってるよ。今日は準備だろ」

「もう、その様な日なのですね。お別れになってしまうかと思うと、とても淋しいです」

そうだよな。ミカツチさんも一緒に旅ができればいいんだけど、この国の中にいる間ならともかく、それ以上は無理だもんな。いずれは別れがあるんだ。それがいつかってだけだ。

「出発はまだ明日ですけどね」

少しでも長いと思いたい。

「もう明日なんだよ。だから、ファイもちゃんと準備してよね」

「わかってるよ。ほら、さっさとその手芸店に行こうぜ」

「その調子だよ。それじゃミカツチさん、行ってきます」

「行ってらっしゃい」

「ほら、行こう」

「あ、ああ」

キヨカは慌ただしく道場を後にする。

「どうしたんだよ」

慌てて追いかけるものの、追いついたのは、道場から少し離れた場所だった。そこで、ようやく立ち止まった。

「ふう〜。この辺なら大丈夫かな」

ん？ どうしたんだ？ 声が沈んでいる。

「シータ？」

いつもとは違う雰囲気だったので、顔を覗き込むと、

「シー……………タ？」

泣いてるのか？

なんて訊けるわけがない。

涙が溜まっていて、今にも頬を伝いそうさ。

もしかして、急いで道場を出たのって、これをミカツチさんに見せないためなのか？

急ぐ事で自分を誤魔化して、哀しいのを紛らわせようとしたのか？

そうだよな。そりゃ、淋しいわけがない。

だけど、別れはキヨカもわかっているはずだ。

「……………」

さて、この状態で俺はどうすればいいんだろうな。

このまま、このしんみりした空気に付き合うべきなのか？

それとも、見なかった、気付かなかったフリをして、手芸店に行こうぜ、とでも言うべきなのか？

俺にはわからない。

結局、茫然と立っているしかできない。

結果的に、この空気に付き合う事になってしまった。果たして、この選択が正解だったのか、それはわからずじまいだ。

「ファイ、行こうか」

沈黙を破ったのはキヨカだった。

「あ、ああ」

平気だというわけじゃないだろう。それをなんとか堪えようとしているだけだ。それがわかるだけに、とてもつらい。

「なにも言わないで」

歩き始めた時の、キヨカのその言葉が、胸に突き刺さった。

わかったよ。なにも言わないし、なにも訊かない。その必要はないわけだもんな。

しばらくキヨカの先導で歩いていく。

その店は、被服の店が並んでいる一角にあった。

外からはそういう店だとはわからない。だけど、ドアを開けて中に入ると、壁一面に反物があり、中央には木で作られたボタンなんかの小間物がたくさん並んでいた。

「すげえな……」

「すごいでしょ」

キヨカは自慢げに言うが、今回は確かにそうだ。

「いらっしやいませ」

奥から出てきた赤くて横から四対の突起があり、まるで蟹のようなフォルムの仮面の女性がこの店の店主らしい。

「いくつか生地とか……えっと、ファイ、具体的になにがいの？」

こいつ、なにが必要かわかってなかったのか。

まあ、作らないんだから、わからなくて当然か。

「そうだな……」

キヨカはマスコットを作れって言ってたっけ。基本的な裁縫セットはあるから、針は必要ないだろうな。

「とりあえず生地と、糸。それと綿があれば」

基本的にはそれだけで大丈夫だ。できれば、裁ち鋏も欲しいけど、それは勝手に選ぼう。キヨ

カに言っても、わからないかもしれないし。

「あとは、ボタンとかそういうのかな」

「わかったよ。それじゃ、色々と選ばせてもらいます」

「どうぞ、ごゆっくり」

早速、キヨカは生地を選び始めた。

「ねえ、生地ってどのくらいいるの？」

「そうだな……」

どのくらいの大きさと、何個くらい作るかによるよな。

「なあ、どのくらいのものを作ればいいんだ？」

「ん？ マスコット？」

「そうだよ。他になにがある？」

「そうだな……。このくらい？」

そう言いつつ、手で大きさを伝えてくる。どうやら、片手に乗るくらいらしい。

「で、それをどのくらい作るんだ？」

「作れるだけ。せっかくだし、いっぱい売ろうよ」

「……………」

ノープランなのか。きっかけだけで、全部俺任せって事だな。

「じゃあ、生地は適当でいいよ。ただ、多すぎても荷物になるだけだぞ」

布は意外と重いんだ。買うのはいいけど、運ぶのが大変なんだ。

「了解。可愛い布を探すね」

生地はキヨカに任せてよさそうだな。

俺は、他に必要そうな材料を探そうか。

マスコットか……。普段作らないけど、まあなんとかなるだろ。

適当なボタンを見繕う。

「おっ、スパンコールみたいなものがあるじゃないか。こっちには、ビーズっぽいのも」

細い紐もあった方がいいよな。

見ていると、色々なものが揃っていた。

この店は本当に当たりかもしれない。

見ていると夢中になってくる。

最終的には、キヨカは大量の生地を選んでいった。

しかも反物そのままだ。

「それは多すぎだっけの。これって、計り売りできるんですか？」

「はい。どのくらい切りましょう」

「そうですね……」

選んでいる生地は、全部で一〇種類以上。一つ作るのに、どのくらいいるんだ？ 作った事のないものはよくわからない。

「全部、三メートルずつください」

「わかりました」

三メートルもあれば、いくつも作れるだろう。パーツ毎に生地を変えてもいいわけだし。だいたい、一〇種類以上あるわけだから、単純に三〇メートル以上の生地を買う事になる。

それだけになると、金額も相当なものだ。

さらに、俺が選んだ小間物や綿もある。

会計は三〇〇〇〇謳華を越えた。

「いっぱい買っちゃったね」

「そうだな」

重い荷物は、俺が担当するんだよな、やっぱり。で、キヨカはボタンなどの小間物を持っている。

「いっぱい作ってよね」

買ってから後悔した。よく考えれば、こんなに作る必要もないんじゃないか？ 俺は商売でも始めるつもりなのか？

っていうか、そもそも、それを全部俺一人で作るわけだろ？ キヨカにできるわけがない。

もっと少なくしておくべきだった。これじゃ、自分で面倒を抱え込んだみたいじゃないか。

いや、実際そうか。

どうしようかな……。

どのみち、作れる数は決まってくる。大量生産は無理だ。

余った生地なんかは、他の世界で売れるかもしれないよな。うん、そういう事にしておこう。

道場に戻ってくると、ミカツチさんは一人で素振りをしていた。今日は木刀じゃなくて、あの日本刀だ。

その姿がとても美しく、つい見惚れてしまう。

「ただいまです」

キヨカが声を掛けると、ミカツチさんは素振りを中断する。

「お帰りなさい」

ミカツチさんの笑顔に迎えられる。

こんな事も、これが最後だろうな。

「たくさん買って来られた様ですね」

俺たちの荷物に驚かれる。

「はい。ファイにはいっぱい作ってもらうんです」

「わたしにはよくわかりませんが、ファイさん、頑張ってくださいね」

「……………はい」

改めて見ると、この量はちょっとゲンナリするよな。多すぎるだろ。

やっぱり、このまま他の世界で売った方がいいんじゃないか？

そう提案しても、キヨカは即答で却下するだろう。

「っていうかさ、これで準備は終わったんじゃないのか？」

「ん？ そうだね……。荷物をまとめたら……って、すぐに終わるね」

「だろ？ だったら、日が暮れるまでは、まだ修行できるよな。つうか、自主練くらいできるだろ」

そうだよ。絶対に今日は修行をしちゃいけないってわけじゃないんだ。できる時間があるなら、俺は少しでも強くなりたい。

「そうだね。でも、マスコット作りに支障が出ないようにしてよね」

「……それが優先事項かよ」

「当たり前でしょ。それが最優先」

言い切られた。

「……………了解」

納得しかねるが、ここはしょうがないか。こういう生活面は、キヨカに任せておくべきだろうし。

「わかったら、修行は程々にしておくんだよ」

全面禁止ってならなくてよかったのか。素振りくらいは、できるからいいか。

「じゃあ、俺は素振りでもしてくるわ」

「しょうがないな。我慢できないんだね、ファイは」

「そういう事だ」

そうと決まれば、素振りでもしておくか。こう毎日していると、なにもしないのが気持ち悪い

というか、不安になるというか.....。

「じゃあ、思う存分すればいいよ。荷物は私がまとめておいてあげるね。さっすが出来る女だね、私は」

.....まあ、自分でそんな事を言えるくらいだから、大丈夫だろうな。

というわけで、俺も風伯を持って素振り始める。

「ミカツチさんとこうして並んで素振りをするのは、これが最後になるんですね」

「そうですね。淋しくなります」

「今までありがとうございました。ミカツチさんに出会わなければ、俺はこんな強くなれなかったと思います」

「いえ、わたしこそ、心苦しさを少しだけ解放され、償いが出来た思いです」

心苦しさを？ 償い？

なにかはわからないが、それを訊くのはこの国のルールからして無理だろうな。

「よくわかりませんが、少しでもミカツチさんの気持ちが軽くなったならよかったです」

「はい。ファイさんとシータさんにお会い出来て良かったです。自らが果たせなかった使命を、継いで頂いているとわかっただけで、わたしは救われました」

「.....」

使命？

やっぱり、ミカツチさんはなにかを知っているのか？ ヒナゲシさんとリュウドウさんみたいに、昔に蟲(ベステート)を封印する旅に出た人なんだろうか。

確認したい。

だけど、確認できない。

このもどかしさは、なんとかならないのか？

「.....」

ただ、それ以降は、どちらも言葉がなかった。なにを言えればいいんだろうか。なにも口にできない。

そのまま、日が暮れるまで素振り続けた。

お蔭で、腕がパンパンになった。

翌朝、ついに出発の朝だ。

「それでは、お世話になりました」

「お世話になりました」

俺とシータは、ミカツチさんにお礼を言う。

「いえ、こちらこそ、楽しい時間でした」

ミカツチさんは、きっと笑顔なんだろう。仮面で見えないけど。一一涙を流したくても、別れは笑顔で。

「ファイさん、シータさん」

「はい、なんでしょう？」

「一つお願いがあるのですが、宜しいでしょうか？」

お願い？ なんだろう？

「これから先の旅、この刀を持って行って欲しいのです。わたしは、ここから移動する事が出来ません。可能でしたら、この刀をわたしが過ごした村に届けて頂けないでしょうか」

「この刀を……？」

「ミカツチさんの村……？」

俺とキヨカは言葉を失った。

どうする？ とキヨカの方を見る。

ちょっと私に訊かないでよ、と小声が聞こえた。

だよな……。

きっと、この刀は貴重なものだろう。ミカツチさんにとって、なくてはならないもののはずだ

。

伝説の四刀ってわけじゃないけど、ミカツチさんにとってはそれと同等以上のものだろう。

だから、おいそれと預かるなんてできない。

もちろん、ミカツチさんの気持ちがわからないわけじゃない。

自らが生きた証なんだろう。

俺たちの想像が当たってるなら、この世界から移動できなくなって、元の世界に戻れないんだろう。だからこそ、これを遺品として預けたい。どの村なのかはわからないけど、きっと戻れば神様が調べてくれるだろう。

ミカツチさんがどの時代の人なのかはわからないけど、その子孫がいるのなら渡してくれるはずだ。

だけど、それと同時に、この刀は今のミカツチさんを支えている気がする。

刀を交えたからこそ感じる事だ。あの時、この刀の想いが伝わってきた気がする。

だからこそ、簡単に受け取るわけにはいかないんだ。

「すみません。そんな大切なものを預かれません」

その言葉に、ミカツチさんが言葉を失ったのがわかる。

「わたしは、ここを動く事が出来ないのです。他に居場所はありません。後生です。これを村に。ふ……」

「ミカツチさん、それ以上は聞けません」

慌てて言葉を遮る。

誰かが盗聴しているとは思わないが、危険だと思える事はしない方がいいだろう。

俺たちはともかく、ミカツチさんはここ以外にないみたいだから。

「申し訳御座いません」

ミカツチさんは肩を落とす。

危ない危ない。

まだこの国を出るわけにはいかないんだ。

「でしたら、これだけでもお願い出来ないでしょうか。せめて、これだけでもお願い致します」

そう言って差し出されたのは、刀に付いている房だった。それぞれに付いている紫の房と黒い房、それを俺に差し出している。

「本当の事を申しますと、この刀は大切な方の形見でもあります。ですので、手放すのは心苦しかったのです。ファイさんが断って下さり、少しだけ安心致しました」

それが本当の事なのか、それとも俺の心を軽くするためか、どちらなのかはわからない。だけど、その言葉をそのまま受け取らせてもらおう。

「ですが、なにかを持ち帰って頂きたい気持ちは変わりません。せめて、これだけでも。わたしたちの証として、これを届けて頂けないでしょうか」

「でも……どこかわかるかな？」

「シータ。それはなんとかなるだろ」

「お手間をお掛け致します。この房は、わたしの村に伝わるものですので、おそらく他の村の者でもご存じの方がおられるはずです」

「シータ」

「それくらいだったら、いいんじゃないかな。ただ、私たちだって、いつになるかわからないけど……」

そうだな。それに、戻れる保証はない。

「それでも構いません。わたしはここを離れられません。ですが、ファイさんたちは違います。このような機会は二度とないかもしれません。でしたら、全てをお二人に託したいのです」

「……………わかりました」

そこまで言われたらしょうがない。

「その房、確かにお願いします」

なんだか、重大な使命が増えた気がするな。

「この房は大切に届けさせていただきます」

気持ちが込められた重い房だ。

「ミカツチさん、絶対に届けます。いつになるかはわからないけど、きっとミカツチさんの想いを届けます」

「お願い致します」

泣いていた。

今まで、涙を見せる事のなかったミカツチさんが泣いている。

仮面で見えなくてもわかる。

「シータ、そろそろ行こうか」

「……………」

キヨカは無言で頷く。きっと、こいつも泣いてるんだろうな。

正直、俺も泣きそうになっていた。だからこそ、早く出発してしまいたかった。

「サヨナラ、ミカツチさん」

「さようなら、ファイさん、シータさん」

涙声で別れを告げる。

もう二度と会う事はないだろう。

この国にいる間は会えるだろうけど、その先は無理だ。

こんなに別れたくないのって初めてかもしれないな。長い間、ずっと一緒に生活してただけに、離れるのは淋しいよな。

「ねえ、ファイ。やっぱりもっここにいない？」

「……いや、俺たちの使命を果たそう」

「ファイは淋しくないの？ あれだけお世話になったのに？」

「俺だって淋しいさ。だけど、先に進まないと。それに、今はミカツチさんから、大切なものを預かったんだぞ。これを絶対に届けないといけないだろ」

「……………うん」

蟲(ベステート)の封印以外に、この房を届けるという使命が増えた。

「これって、やっぱり詩稀に関係あるよね？ ミカツチさん、ふ……って言いかけてたから、譜遊かな」

「だろうな。その辺も、帰ってから神様にでも訊けばわかるんじゃないかな」

「……そうだね」

きっと神様だったらわかるだろう。資料がなくても、キヨカのじいさんの家の蔵ならなにか見つかるはずだ。

「大切にしなきゃだね」

「ああ、そうだな」

これは肌身離さず持っていないといけないよな。

「なあ、シータが持っていてくれないか？」

俺には重すぎる。

「ファイが持っててよ。そんな大切なもの、預かれないよ」

「俺だって……………だったら、こっちだけでも」

紫の房をキヨカに渡す。

「これで、絶対に一緒にいるしかないだろ。まあ、それがなくてもそうなんだけど」

「わかったよ。二人で、ちゃんと届けよう」

重い荷物を二人で分けあう。

そんな事をしていると、駅が見えてきた。

「お別れだね」

「そうだな」

振り返って、今歩いてきた道を見る。

一ヶ月くらいだけど、ここで過ごしてきたんだ。俺はあまり出歩いてないけど、多少の思い出はある。

キヨカは俺以上に思い出があるはずだ。

「ファイ、そうしてると離れられなくなっちゃうよ。だから、思い切って行こう」

キヨカは振り返らずに歩いていく。

「そうだ。ちょっと日持ちする食料も手に入れてあるからね。今回は大丈夫だよ」

「そうか。食事の心配もあったんだった」

すっかり忘れていた。

保存食を売ってしまったから、手元には日持ちのする食料はない。だけど、キヨカはちゃんと用意していたらしい。やっぱり、その辺はキヨカに任せて正解だな。

いよいよ本当にこの街とはお別れだ。

列車はもうすぐ出発する。

列車の中で、俺はひたすらマスコットを作り続けた。最初は悪戦苦闘、試行錯誤だったが、いくつか作っていると、次第にコツがわかってきたというか、簡単に作れるようになってきた。

いくつかの生地を合わせて、そこに綿を詰めて、ボタンやフェルトで飾って、動物のマスコットを作っていく。そこに細い紐を付ければストラップみたいになる。

「すごいね」

キヨカは褒めてくれた。俺としても、なかなかの出来だと思う。初めてにしては上出来だろう。

なんとか、一五個を作る事ができた。

「ちょっと少ないけど、これくらいあれば商売できるかな」

キヨカが満足する数じゃなかったみたいだが、これが限界だったの。

確かに、これだけだと並べれば淋しいだろう。だけど、一人で作るには、限度ってものがある。俺が作っている間、キヨカはなにもせず、ただ俺の作業を見ていただけだからな。なんの役にも立たないっての。

そんなこんな列車の旅は、作業をしていた事もありあつという間だった。前日も寝ていただけの気がするけど。

「久しぶりだね……」

というわけで、俺たちは久しぶりの街に戻ってきた。もっとも、ここにそんなに思い入れがあるわけじゃない。だけど、どこか懐かしく感じる。さすがに一ヶ月じゃなにも変わっていない。

いや、それはいい事なんだよな。だって、変わっていないって事は、あれから蟲(ベステート)が出現して暴れていないって事だろ？ その点じゃ、いい事だよな。

だけど……とも思う。

一ヶ月の間、本当に蟲(ベステート)は出現しなかったのだろうか。ここじゃなくても、他の場所に出現していなかったのだろうか。

なにしろ、この国は無駄に広い。俺たちが気付いていないだけで、他の地域に出現していたかもしれない。

「まあ、どっちにしろ仮定の話だもん」

「ん？ どうしたの？」

「独り言」

「そっか。じゃあ、早速これから住む場所を決めないとね。私としては、前の場所でいいんだけど。私とファイの愛の巣だもん」

「……………」

その言い方はともかくとして、前の場所で不便はなかったからそこでいいかな。

そんな話をしながら、俺たちは案内所に向かった。

案内所も相変わらずだった。

住む場所を決めるのは簡単だった。前の場所が空いていたのだ。それならそこで、とあっさり決まった。

「それですね、お店を出したいんですけど……」

キヨカが切り出す。

「どのようなお店でしょうか？ 具体的になにを販売するかなど、決まっておられますか？」

「はい、それは決まっています。これです」

と、キヨカは俺が作ったマスコットを一つ見せる。

ほう～、とそれを受け取った狐のような目の細い青い仮面の人は、しげしげと見ている。

「これは、この国であなた方が作られたものですか？」

「はい。ファイが作りました」

キヨカが答える。

「そうですか。こういったものをいくつか販売されると？」

「そのつもりです」

そうですか……と答えて、青い仮面の人は、なにか書類を取り出す。

「でしたら、ここはいかがでしょう？」

この街の地図の一角を指す。

「ここは、芸術家横町と呼ばれておりまして、技工品の販売や絵画などの美術品の販売を行っております」

「芸術家横町……」

「ここでしたら、出店費は必要ありません」

「「えっ？」」

俺たちは顔を見合わせる。

出店費が必要ないのは魅力的だ。

「でしたら、ここに住まわれてはどうでしょう？ 賃料は変わらず、空き店舗がありますので住む事が可能です」

なるほど。ここは店舗と住居が一体になってるのか。まあ、芸術家ならその方がいいな。

「じゃあ、そこで……」

と、俺が言いかけた時、

「なにか他とは違う条件があるんですか？」

キヨカがそんな質問をした。

「そうですね……。特に制限はありません。ただ、建物の契約期間が、最短で六〇日単位となりますね」

「六〇日……」

マジかよ。

それは無理だな。

「そこに住まなくても、お店は出せるんですか？」

さすがに、そんな期間の契約を結ぶ事はできない。せめて、もう少し期間が短ければいいんだ

けどな……。

「出店は可能ですが、店舗はございませんよ」

「店舗がない……。それって、売り歩き、とか？」

「いやいや、フリーマーケットみたいになら大丈夫だろ」

わざわざ行商をする必要はないだろ。それに、行商するような商品でもない。

「売り歩いていただいても結構です。店舗を持たず、空いている場所で販売を行っていただいても構いません。ただし、その場合は、なんの保証もございません」

やっぱり安い話にはなにかあるよな。リスクはある、と。

「わかりました。それでいいです。空いている場所で、勝手に売れって事ですよ」

「販売の許可はさせていただきます。ただ、許可されていないものを販売する事はできません」

「わかりました。それでいいです。私たちは、これを売ります」

「では、書類を作成します」

本当にこれでいいのか？

「なあ、本当にいいのか？」

「いいじゃない。タダでお店を開けるんだよ。儲けがなくても出店料を取られるよりいいじゃない。気軽な商売だよ。さすが芸術家の場所だね」

キヨカはかなり楽天的なようだ。

「それに、いつやめてもいいみたいだし、その方がいいでしょ」

「だけど、部屋からはちょっと遠いだろ」

俺としては、そこもネックなんだよな。

「これくらい大丈夫でしょ。三〇分くらいじゃないの？」

「それが遠いってんだよ」

やっぱり、キヨカの田舎感覚だとそうだよな。だけど、一般的には徒歩三〇分は遠いだろ。

「いいじゃない。別に毎日通う必要もないでしょ」

そう言いつつ、結局毎日通う事になるのは明白だ。

「やっぱり、飲食街が近い方がいいじゃない」

「そこかよ……」

キヨカ之最優先は食か。そこに異論はないけどな。だけど、毎日か……大変そうだ。

そうこうしている間に書類は完成したらしい。キヨカがそれにサインして契約成立。これで、俺たちは芸術家横町で店を出す事ができる。青空店舗だけだ。

「じゃあ、どんな場所か見に行こうか。空いてる場所の確保も必要だしね」

意気揚々と歩きだしたキヨカを追う。

地図を頼りにやってきた芸術家横町は、なかなか壮観だった。

芸術家横町というだけに、それなりの雰囲気がある。

大きな真っ直ぐの道の両脇に、ずらりと店舗が並んでいる。

絵画や壺を売っているかと思えば、アクセサリーが売られていたりする。

「すごいね、これ」

「なんでもありだな」

工芸品なんかも売っている。かと思えば、洋服も売っている。食べ物以外の全てがあるんじゃないかって感じだ。まさになんでもありだな、こりゃ。

「あそこには、刃物専門店なんてあるよ。あっちには、楽器屋さんもある」

俺はキヨカの声なんて届かないほど、この景色に酔っていた。

こんな場所で、俺のマスコットを売るのが。

どれもこれもかなりの一品だろ。そこで、俺の手作りマスコットは、あまりに浮いていないだろうか。

「っと、お店探索はこれからすればいいよね。とにかく、場所探しだよ」

口ではそう言っているものの、両脇の店舗をじっくりと見ている。

楽しんでやがるな。だったら、俺だってそうさせてもらおうか。様々な店があって、退屈はしそうにない。

「ファイ、なにしてるの。場所探しするんだよ」

自分の事は棚上げにして、いきなり注意された。

「お前だって楽しそうに見てるだろ」

「これは市場調査だもん」

「市場調査ね……。なんて便利な言葉」

「便利もなにも事実だもん。でもさ、そんなに人いないよね」

キヨカは道路を見る。

「そうだな」

確かに人通りは少ない。どの店も繁盛しているとは言い難い。もっとも、ここの住人は商売よりも、制作活動を楽しんでいるのかもしれないけど。

「とにかく、私たちはここで一番の稼ぎをするんだよ」

「……それは無理じゃないか？」

正直な感想だ。

個数ならともかく、金額は難しいぞ。

ちらっと見えた絵画だが、その金額は途方もないものだった。〇が七つほどあったんだがな。まあ、そういうのばかりじゃないだろうけど。

他を見ると、手頃な価格もあって安心した。

「とりあえず歩いてみようぜ」

「そうだね」

そういうわけで、俺たちは一通り歩いてみる事にした。ここから見る限り、かなり広そうだしな。

「歩いてるだけで楽しいね」

「まあな」

中が見えない建物もあるが、なかなか面白い空間だ。

しばらく歩いていると、広場が見えてきた。真ん中には噴水があり、憩いの場って感じだ。

「ねえ、ここでお店っていいかもね」

確かにここはいいかもな。出店できればなんだけど。

「……無理っぽいぞ」

案内所で渡された用紙を見せる。

「ん？ ……………出店は道路脇に限られる。その他での出店は禁止。……なにこれ」

「というわけだから諦めろ」

「……しょうがないね。違反して、退国させられるわけにはいかないもんね」

「だな」

どうやら、この広場を中心に道がいくつかに広がっているみたいだ。その道の両脇にも店——というか、これはもうアトリエだな——が並んでいる。

全体的には、絵画が多いようだ。まあ、わかりやすいし、単純に嗜む人が多いんだろうな。

ちらっと見つつ歩いただけだが、かなり疲れた。

なによりも広い。

「同じお店がなくてよかったね」

「ん？ 絵画の店なんか、いっぱいあったろうが」

「違うよ。私たちと、だよ」

「そっか。そうだな」

そうだよな。俺たちだってここで店を出すんだ。競合店はなければいい。

一応、ちゃんと市場調査っぽい事はしてたんだな。

「というわけで、場所探しだけど……」

キヨカはすたすたと歩いていく。最初の場所の方向だ。

「ここにしよう！」

と、指したのは、店舗と店舗の微妙な隙間だった。

両隣は絵画の店舗みたいだ。

その間には、二メートルくらいだろうか、隙間というか、建物が離れているのでスペースができています。

「ここなんかいいと思うよ」

「ここか……」

まあ、ありかな。ただ……、

「両脇の店はいいのか？」

「それは、これから確認するんだよ」

そう言うなり、キヨカは右隣にあたる店舗に突撃。

こういう無駄なアクティブさはすごいよな。

しばらくして出てきたキヨカは、るんるんスキップだった。それだけで、訊かなくてもいい。

「別にいいんだって。売るよりも描く方が楽しいから、その邪魔にならなければいいみたいだよ」

「そっか」

「じゃあ、次に行くね」

と、今度は左隣へ。

「今度はどうかね……。まあ、この雰囲気だと、問題なさそうだけど」

案の定、そういう結果だった。

絵を描く人って、商売というよりはやっぱり制作なんだよな。

「というわけで、明日からお店を出せるね」

「なあ、シータ」

水を差すようだけど、言っておくべきだろうな。

「なに？」

「せめて、マスコットを並べるなにかは用意しようぜ」

「そんなの、ビニールシートの上でいいじゃない」

「よくないだろ」

「そりゃ、そうかもだけど。なにもないよ」

「だから、調達しようぜ」

「……出費だよ」

そこをケチるのか。

「必要経費だ」

いくらなんでも、多少は店っぽい体裁は必要だろ。

「じゃあ、どうするの？」

「最低限、机と椅子は欲しい」

地べたに座るのは疲れるし、立ちっぱなしもイヤだからな。

「しょうがないな。探そうか」

「ああ」

というわけで、出店に必要なものを探す事に。

日が暮れる頃に、机と椅子を二脚用意して、出店予定のスペースに置く。

「淋しいね」

「しょうがないだろ」

所詮は仮の青空店舗だ。

「ファイは、店番しながらマスコットをいっぱい作ってね」

「……なに？」

キヨカがとんでもない事を言い出した。

「当たり前でしょ。私はなにも作れない。だから、ファイが作る。作るには動くわけにはいかないでしょ。だから、店番。もちろん、私もするけどね、売り子さん」

「.....それならさ、俺は部屋で作ってもいいか？」

その方が作りやすいし。

「ダメだよ。ここに私を一人にするつもり？ 一緒にいないとなんでしょ」

「.....わかったよ」

それを言われるとな.....。確かにその部分においては、キヨカの言うとおりになんだよな。極力一緒にいないといけない。

ここで作るしかないのか。

ってというか、まだ作らせるんだよな。そりゃそうか。材料はまだまだ余っている。

「わかったら、明日の開店に備えて.....前祝いだよ」

そう言うなり、すたこらと飲食街に向かって歩いていく。

なるようにしかならないよな。

「今日からお店、頑張るぞ〜！」

朝からキヨカは元気だった。

目的が変わってきている気がするけど、俺もちょっと楽しんでいるのであまり言えない。

「ファイ、元気ないぞ。もっと元気に」

「そもそも、俺はなにもしてないぞ」

「だからだよ。初日くらいは、元気いっぱいじゃないと」

初日だけでいいのか？ そんな事はないよな。

「しょうがないな……。頑張るぞ〜！」

と、両手を突き上げる。

「よしよし、よくできました。頑張ろうね、ファイ」

どうやら満足してくれたみたいだ。中途半端にすると、もう一度とか言われそうだったからな。全力でしておかないとな。こういうのは、一回で充分だ。

「ファイ、私たちのお店だよ」

「……そうだな」

修行をしない日ってのは、なんだか気持ち悪いな。列車に乗っていた時は、さすがに素振りすらできなかったからな。そういや、昨日もしてないな。店の準備やらなんやらで忘れていた。でもって、今朝もできていない。

どうやら、この街にいと忘れがちになるようだ。ミカツチさんがいないからかな。

それにしても、ここから店までが遠い。キヨカにすればそうでもないみたいだけど、やっぱり徒歩三〇分は遠いと思う。

そんな道のりだけど、キヨカはるんるんで歩いている。

「ファイってさ、そんなに遠く感じるかもだけど、ミカツチさんといた頃は、もっと走ってたじゃない」

「……そういやそうだな」

キヨカに言われて気付いた。俺って、もっと長い距離を毎日のように走ってたんだ。

徒歩三〇分ってどのくらいなんだ？ 距離にすると三キロくらい？ もっと短いのか？ だったら、すぐだぞ。一里もないじゃないか。

「走っていくか」

「おっ、ファイがやる気になったね」

走ればものの数分だ。そう考えれば短いんだな。

「そんなに遠くないでしょ？」

「そうだな。毎日の行き来は、ランニングにいいかもな。むしろ短いくらいだ」

こんな距離だと物足りないくらいだ。店番してるとなると、修行なんてできるわけないし、こういう時に走るくらいだよな。

「私の考えがようやく伝わったみたいだね。そこまで考えてたんだよ」

「……どうだか」

本当かどうか疑わしいものだ。だけど、結果オーライってやつだよな。

「本当なのにな……」

「どうせ、飲食街が近いからだだよな」

「そ、そんな事にゃいよ」

どもった上に噛んだ。

「でも、シータのお蔭なのは確かだ。サンキュな」

「そんな褒めないでよ。照れるじゃないか、この」

本当にすごいよ。まあ、すごいっていえば、こんな会話をしながら、併走できてるんだだよな。結構マジで走ってるんだけど。キヨカもミカツチさんとの修行で鍛えられたな。

そんな事を感じていると、あっという間に到着した。

芸術家横町は一一閑散としていた。

誰もいないどころか、どの店舗も閉まっている。

「朝は弱いのかな」

「そうだろうな」

もっとも、朝から営業する必要はないんだろうな。昼間から夕暮れにかけて、そんなところだろう。

生活必需品ってわけでもないから、急に必要な事も少ないだろうし。一部を除いて。

「じゃあ、準備をしようか」

そう言うが、実際にする事はほとんどない。俺が作ったマスコットを机に並べるだけだ。机は、昨日からここに放置したままだ。一応、両隣には声を掛けている。

「よしできた」

数も数なので、時間は掛からない。

マスコットの前に、値段を書いた紙を貼ればおしまいだ。ちなみに、一つ八〇〇謳華となった。

俺は高いと思うんだが、採算をとろうとすれば、このくらいになるとキヨカが主張したので、そこは任せる事にした。

「……暇だね」

そうだろうな。誰もいないし。

こんな時間に開いている店は俺たちだけだ。

正確な時間はわからないけど、九時くらいかな。

そりゃ早いよな。

俺たちの世界でも、だいたい一〇時からだろ。あまり九時に開いている店はないよな。そりゃ、ファストフードとか、二四時間営業とか、そういうのは別な。

飲食街ですら、半分も開いてないからな。主に夜だからな。

というわけで、俺たちは誰もいない場所にぽつんというわけだ。

この辺の人たちは、まだ寝てるんだろうな。作業は夜にしてそうだし。勝手なイメージだけど

。

俺はマスコット作りをする事にした。

これくらいしかする事はないからな。

「ねえ、暇だよ」

「ええい、せっかく作業をしようとしてるんだから、邪魔するなよな」

いきなり腕を掴んできた。鬱陶しい。

「だって暇なんだもん」

「だったらさ、明日からは時間を遅くしようぜ。どうせ誰もいないんだし」

「.....そうだね。まだ、私たちの愛の巣にいる方がいいかもね」

「呼び名は自由だけどな、それはなんかやめたい気分だ」

「そんなに照れなくてもいいって」

「照れじゃないんだけどな」

愛の巣って、そういう発想はどうなんだろうね。

「俺だって、ここでするよりも、まだ部屋で作った方が効率いいしな」

外で作るよりも、やっぱり室内で作りたい。だって、外だと風があるもん。作りにくいんだよ

。

「そうだね、明日からはそうしよう。午前中はお部屋で作って、午後からお店で作って。で、夕方からまた部屋に戻って作る、と」

「なんだ、そのスケジュールは。俺は一日中マスコットを作るのか」

「当然だよ。この先の旅費を、ここで稼ぐんだから」

マジか。

そもそも、このマスコットが本当に売れるのかもわからないんだぞ。値段も値段だしな。

人気作家とかならまだしも、俺はただの素人だ。無名もいいとこだ。もっとも、この国だと過去の偉業は知られるわけにはいかないだろうから、そのネームバリューはないのか。でも、そういう才能がある人なら、知らなかった人でも、この国で人気が出るだろう。

「とにかく、ファイはどんどん作ってよ。ここで余っても、他の世界で売ればいいんだから」

「.....商魂たくましいな」

売れ残る前提というのが哀しいが、きっとそうなるだろう。

「初日は、存在感だね。アピールしないとね」

キヨカはこれからの販売計画を立てる事にしたらしい。する事がないわけだし、そういうのを考えてくれればそれでいい。

「その辺はシータに任せる」

「任されたよ」

キヨカは、えっへんと胸を張る。

「やっぱり、宣伝は必要だよな。こういうお店があるってのを、知ってもらわないと話にならないもんね」

そう言ったのはいいものの、プランはなかったらしく、腕を組んで唸りながら考えている。

「じゃあ、俺は作ってるから、シータは考えててくれ」

邪魔さえしなけりゃそれでいい。暇だ暇だと言われるのも、かなり邪魔だしな。まだ誰の姿もない。静かだ。

天気も穏やかだし、こういう日はのんびりと……修行でもしたいな。

なのに、こうして机の前で裁縫だよ。

だけど、しょうがないよな。これからの生活費を稼がないと。

ちくちくとマスコットを作り続ける。

作り始めるのは億劫だけど、作ってるうちに集中してくるもので、黙々と作業を進める事ができる。

作業中、誰も通らず、とにかく静かだった。

気が付けば昼だったらしく、キヨカの空腹を訴える声で作業を中断させられる。俺としては、このままもう少ししたかったんだけどな。というのも、今作ってるのがもうすぐできあがるんだ。

「もうちょっとだけ待ってくれないか」

そう言ったものの、当然のように却下された。

「食事は必要だよ。体が欲してるんだよ」

「それはわかってるけどな。中途半端で中断したくないんだよ。もうちょっとだけ待ってくれよ」

そう頼んで、ようやくちょっとだけ待ってくれた。で、完成した途端、俺を手を引いて駆け出した。

すぐに食べれそうな店で適当にすませる。その辺は、拘らないのかよ、と思ったが、俺としてもすぐに作りたい気分だったので、早さを優先する。結果的に、テイクアウトをしている、謎のファストフードとなった。丼ものっぽいけど、カツ丼っぽいものにスパゲッティみたいなものも入っていたり、よくわからない。旨いものに旨いものを足したら、旨くないはずがない——そういう理論だろうか。

とにかく、それを買って元の場所に戻る。俺は戻ってから食べるつもりなのだが、キヨカは待てないらしく歩きながら食べている。

「なあ、これって旨いのか？」

まあ、キヨカが黙々と食べてるわけだから、不味くはないんだろう。

「ん？ 美味しいよ」

歩きながらよく食べれるな、とも言いたかったが、それはやめておく。

っていうか、美味しいんだ。

「ファイも早めに食べた方がいいよ。温かいうちに食べた方が美味しいと思うな」

そりゃそうだろうよ。温かいものは温かいうちだろ。冷めたら味が落ちるだろうな。

「だからって、お前みたいに歩きながらは無理だって。せめて、どこか落ち着いて食べようぜ」

「ファイは早くお店に戻りたいんでしょ。だったら、これが合理的だと思うんだけどな」

合理的かどうかという問題なのか？ そりゃ、時間のロスは少ないだろう。しかも、温かいうちに食べられる。そう考えれば合理的なのか。

って、いやいや違うだろ。

「確かに早く戻りたいけどな。無人にするのは問題だろ」

別に盗まれるとか、荒らされるなんて思ってないけどな。なにせ、この国で犯罪を犯せば、即時退国処分らしいからな。この国に来る人は、他に行き場がない人ばかりなので、そういう事をする人はいないらしい。これは案内所で以前に教えてもらった。つまり、自国で犯罪を犯してここに逃げ込んだ人もいて事みたいだけど。完全治外法権のこの国にいれば、指名手配されても問題ないらしい。それって怖い気がするんだが、意外な事にそういう人ほど、この国の中では大人しく真面目なんだとか。

事実、この国での犯罪はないらしい。

——まあ、どこまで信じられるのかって話だけど。

なので、犯罪云々はいいとして、やっぱり無人はよくないと思うんだよな。もしかしたら、買いたいって人がいるかも……って、そんな事はないか。

と、そんな事を考えつつ到着すると、店の前に一人立っている。

「シータ、あれ」

まだ食べているシータは、顔を上げて前を見る。

「おひゃふふあん？」

口にもものを入れたまま喋るな。お客さん？ って言いたいんだよな。

「そうみたいだな」

この横町の人なのか、他からここに見に来た人なのか、どっちでもいいんだけど、あの人が最初の客になるわけだ。

「すみません。ちょっと店を空けてたもので」

俺はにこやかに——といっても、顔は見えないけど——話し掛ける。

「ああ、ここの店の人ですか」

振り向いたその人の仮面は、さながら金色の狼のようで、思わず言葉を失ってしまった。声からするに、女の人のような。

「……はい、そうです」

「昨日まではなかったよね」

「ええ、今日から始めたんです」

「そうなんだ……」

そう言いつつ、金狼の仮面の人は、マスコットをひとつひとつ見ている。

「なかなか面白い。この横町にはなかったもので、新鮮だよ」

本当に興味深いようで、じっくりと見ている。そこまでされると、ちょっと恥ずかしくなってくる。なにせ、今その人が見ているのは、結構最初の方に作ったもので、まだ要領がつかめていなかった頃のものだからだ。

「いやはや、こういう発想はなかった。布でこういう立体物を創作するとは……。生き物を模し

た立体物か……素晴らしいね」

どうやら、褒められているらしい。

「よければ、おひとついかがですか？」

「そうだね……。せっかくだし、一ついただこうか」

そう言うと、その人は真剣に選び始める。

「どれにしようかな……。それぞれ違っていて、なかなか面白い。迷ってしまうから、いくつか適当にいただくよ」

どうやら決めかねたらしく、五つ買ってくれた。

「ありがとうございます」

「いやはや、なかなか愉快なお店だ。まだ作るんだろ？」

と、その人はキヨカを見て言う。

「作ったのは俺です」

「……おお、君だったのか」

どうやら、この人はキヨカが作ったと思ったらしい。俺は販売担当だと思われたようだ。実際は逆なんだけどな。やっぱり、そういう風に思うんだろうか。

「ところで、この横町の人なんですか？」

食べ終えたキヨカが、金狼の仮面の人に訊く。

「ああ、そうだよ。その先で絵を描いている。もちろん、画廊もあって、販売もしている」

「そうなんですか」

「また、時間がある時にでも来てくれればいい」

「じゃあ、そうさせてもらいます」

これは、普通なら社交辞令だよな。だけど、キヨカは本当に行くだろうな。俺もこの人の絵に興味があるから行ってみたいんだけど。

「また見せてもらいに来るよ」

と、今度は俺に言って、自分の店に戻っていった。

「ファイ、売れたね」

「ああ、そうだな」

そういや、売れたんだよな。なんだか実感がない。

「一気に五つも売れちゃったよ。こりゃ、バカ売れするかもだよ」

「それはどうだろうな」

たまたま売れただけだ。客数としては一人だけ。大勢の人が買ってくれたならともかく、一人だけだとな……。

「でもさ、ここは芸術家が集まっているでしょ。あの人が言ってたけど、こういうのって珍しいみたいだし、みんな興味を持ってくれるかもしれないよ」

「……そうだな」

その可能性はあるか。皮算用はしたくないが、芸術家は普通とは違うからな。自分が興味を持ったものなら……。そう考えると、本当にバカ売れしそうな気がしてくる。

「というわけで、大量生産だよ」

「……って、俺一人でそんなに作れるかよ」

「そこを頑張るんだよ。というわけで、早速作業だよ」

「飯を食わせろって」

「もう……時間の無駄だよ。歩きながら食べてれば、すぐにでも作り始められたのに……」

生憎、俺はキヨカみたいな事はできないんだよ。そもそも、歩きながら食べるなんて発想はなかったよ。

「じゃあ、ダッシュで食べる」

「ゆっくり食べさせてくれよ」

「極力急いでね」

キヨカは手持ち無沙汰らしく俺を急かす。

ゆっくりと食事もできないらしい。まだ、マスコットはいくつかあるんだから、営業はできるだろうに。

「同じものは二つとないオンリーワンでしょ。だったら、数があつた方がいいに決まってるでしょ」

俺の考えを読んだみたいに言われてしまう。

確かに同じものはないわけだから、選択肢としていくつもあつた方がいいんだろうな。

でもまあ、人通りはないから、今は昼食だな。

それから日が暮れるまで作り続けたが、金狼の仮面の女の人以外、誰も来る事はなかった。

心の歌を奏でて 一仮面の国一 ㊦の㊦

<http://p.booklog.jp/book/102214>

著者：芳田尚哉

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/studiosaix/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102214>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102214>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ